

1990年代に、脳死と臓器移植の問題をめぐる議論の中で、「生命の尊厳」や「人間の尊厳」がしばしば語られた。また、その頃から、「尊厳」という言葉が社会の各方面で語られるようになった。ところが、これらの「尊厳」の概念は、元来、キリスト教に由来するもので、端的には、神が人間に与えた精神に依拠している。それ故、キリスト教を信仰しない多くの日本人が西欧的な尊厳の概念を語ることは、その根拠を欠いており、空虚な観念をもてあそぶことになる。とは言え、「尊厳」という言葉がわが国でも広く用いられている以上、私たちはこの言葉を、わが国の宗教や文化に即して検討する必要がある。そのような理由から、私は仏教、とりわけ日本的な仏教思想にもとづいて、この「尊厳」の考察を行ってきた。

しかし、仏教の思想にもとづいて「人間の尊厳」を語る場合、一つの大きな問題に直面する。それは、仏教において、人間は衆生の一形態に過ぎない。そのため、人間を他の生き物から区別して、人間のみを尊厳を検討することは、仏教の本来の立場にそぐわないということである。無論、日常的生活の中で、人間と他の生き物をまったく区別しないわけにはいかない。けれども、人間を含めた「生き物の尊厳」を考えてみることも必要であろう。

その際に、改めて問題となるのは、「生き物」とは何かということである。さらに、この「生き物」という言葉は、日本語では本大会の共通テーマにもあるように、「いのちあるもの」と置き換えることもできる。その場合、「いのち」とは何か、また、「いのちあるもの」とは何かということも問題になる。仏教の用語として、「いのちあるもの」を衆生や有情という言葉に置き換えることは可能である。しかし、日本のアニミズム的な信仰や、「草木国土悉皆成仏」という考え方、あるいは、「一切は衆生なり」という道元の立場においては、植物のみならず、無情、すなわち無生物までをも「いのちあるもの」に含めることになる。そうしたものまでをも含めた「いのちあるもの」の尊厳を、私たちはどのように考えるべきであろうか。これが本発表の課題である。

ちなみに、この考察は、文献学的手法によるものではまったくないし、一般的な印度学仏教学研究のように、厳密なテキスト解釈にもとづくものでもない。むしろ、一般の人々が、日常の生活や文化の中で当たり前のように見聞きし経験している事柄に即しながら、考察を行うものである。その意味で、本発表は仏教学研究というよりも、現代日本文化論をめぐるエッセイ風の考察となるだろう。のみならず、そこから導かれる結論は、決して特別なものではなく、あまりにもありきたりな、拍子抜けするほどつまらないものになるかもしれない。しかし、そのあまりにも当たり前の事柄こそが、実は、人々が無意識のうちに受け継いでいる仏教思想の結晶と言うこともあるだろう。その意味で、今回の私の発表は、日本人の「無宗教」論に対する一つの回答につながるのではないかと考えている。

〈キーワード〉 尊厳、いのち、縁起、無宗教